みんなのとしょかん

市民図書館
TEL（921）4646
FAX（921）4896
http://www.library.dazaifu.fukuoka.jp/

あたらしくはいった本（令和2年10月貸出開始資料から）

●小説　もっこすの城（伊東潤／著）　始まりの木（夏川草介／著）　自転しながら公転する（山本文緒／著）　シグナル（山田宗樹／著）　イノセンス（小林由香／著）　象牛（石井遊佳／著）　隣はシリアルキラー（中山七里／著）　わたしが消える（佐野広実／著）　われもまた天に（古井由吉／著）　暗闇にレンズ（高山羽根子／著）　風よあらしよ（村山由佳／著）　私はゼブラ（アザリーン・ヴァンデアフリートオルーミ／著）　ワシントン・ブラック（エシ・エデュジアン／著）

●随筆・詩などの文学　<読んだふりしたけど>ぶっちゃけよく分からん、あの名作小説を面白く読む方法（三宅香帆／著）　たべるたのしみ（甲斐みのり／著）　炉辺の風おと（梨木香歩／著）

●その他の本　コロナの時代の暮らしのヒント（井庭崇／著）　人間の土地へ（小松由佳／著）　薬のギモン早わかり帖（藤井義晴／著）　ふわふわカステラの本（中川たま／著）　人に話したくなる土壌微生物の世界（染谷孝／著）　語感力事典（山口謠司／著）

『もっこすの城』
伊東潤
KADOKAWA

『始まりの木』
夏川草介
小学館

『自転しながら公転する』
山本文緒
新潮社

●新型コロナウイルス感染拡大防止のため、来館の際はマスク着用などのご協力をお願いします。

としょかんカレンダー

令和2年12	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30	31		

◯のついた日は休館日

金・土曜日（祝日を除く）は午後7時まで開館しています。

太宰府の文華
～公文書館だより㊽～

古代大宰府と「唐物（からもの）」

かつて日本では、外国からの舶載（はくさい）品（ひん）は「唐物」と呼ばれていました。これは、古代に限ったことではなく、中世から江戸時代にかけても同じでしたが、ここでは平安時代の「唐物」についてみてみましょう。

「唐物」という言葉が、初めて記録にみえるのは九世紀初めのことです。特に平安時代の「唐物」の語については、外国からの舶載品全般ではなく、中国製品あるいは中国経由の輸入品に使用されたという意見があります。「唐物」の歴史的意義を、王権との関係から考察しようとした皆川雅樹（みながわまさき）さんは「唐物」の語が、王権が先買・把握すべき外来品の呼称として使用されたものとみていますが、こうした考え方には、「唐物」をどう捉えるかという基本的な視点からの異論もあります。

ところで、この「唐物」の具体例をうかがえるのが、十一世紀半ばに成立したとされる『新猿楽記（しんさるがっき）』という書物です。そこには「本朝の物」（日本で産出、あるいは生産される物）と対比する形で、「唐物」とされる四十数種類の物品が書き上げられています。その中身をみると、香料（沈香（じんこう）、麝香（じゃこう））や薬物として用いられる物が多く、また綾・錦などの織物も含まれていることがわかります。

さて、平安時代における対外交易の場は、ほとんどが大宰府だったことから、これらの「唐物」も大宰府を経由して京にもたらされました。一方で、大宰府に集積された「唐物」が「諸院諸宮諸王臣家」の使者や大宰府の「管内吏民」（大宰府管内の役人や人民）、あるいは「（大宰府）郭内富豪の輩」と呼ばれた人々によって、現地において高値で購入されるということも起こっていました。これは先に述べた王権の先買に抵触することもあって、しばしば禁令がだされ、またしかるべき「唐物」確保のために「交易唐物使」と呼ばれる使者が大宰府に派遣されるということもありました。

大宰府との関連でいえば、ここで重要なのは、たとえば「管内吏民」「郭内富豪の輩」とはどういう人々で、どのように「唐物」を入手していたのか（入手ルートの確保や支払手段など）といった問題を、大宰府との関わりのなかで考えてみることです。いま検討を進めていますが、関連史料は必ずしも十分ではない面もあります。しかし、これを見極めることは平安時代の大宰府の歴史をより豊かに理解する上で、必要なことだと考えています。

太宰府市公文書館　重松　敏彦